ヲ觀察シ、其ノ數例ニ就キテ、「レントゲン」寫眞ヲ添ヘテ所見ヲ述べ、斯ノ如キ例ノ看過セラルル事が多クシテ、必ズシモ稀有ナラザル事ナリト唱フ。

而シテ其ノ病原トシテハ、有癭性齒性骨炎ト同様ニシテ、以前ニ拔去セラレン齒牙又ハ現存齒牙ノ肉芽性齒根膜炎ニ因ルモノニシテ、成人ニ生ジ上顎ニ最モ屢々現ハル、モノ、如シ。此ノ際拔牙ト關係最モ深ク、肉芽組織ノ殘存又ハ破裂ノ結果骨組織ニ對シテ破壊作用ノ生ズルモノナリ。尙又、外傷殊ニ困難ナル拔牙ノ爲メニ、二次の骨炎ヲ起ス事モ考ヘラル、處ニシテ、要スルニ原發的ニハ常ニ齒根膜炎が存在シ、此ノ骨炎ハ第二次のモノナリ。此ノ疾患ニテハ、以前拔牙セラレン齒根部ニ相當シテ、不正形ノ空洞生ジ甚シク廣範ニ互ル事アリ。空洞ハ軟化セル脆キ骨組織ト共ニ柔軟ナル肉芽組織ニ充タサル。時トシテコノ特有ナル空洞ヲ見ザル事アレドモ、齒槽突起ノ骨組織ハ海綿様ニ軟化シテ脆ク之ヲ被覆セル粘膜ハ稍々腫脹シテ赤色ヲ呈スル事アリ。

其ノ症候ハ極メテ多樣ナレドモ主トシテ疼痛ヲ訴フルモノニシテ、其ノ程度ハ或ハ壓迫疼痛ノ爲ニ義齒ヲ使用シ得ザルモノ、或ハ疼痛ノ部位明確ナラザレドモ其ノ範圍ノ廣キモノ、或ハ神經痛様ノ疼痛ヲ伴フモノアリ。診斷ハ頗ル困難ナル事アリテ往々看過セラル、處ナリ。要ハ此ノ顎骨炎ノ所在ト齒牙疾患トノ關係ヲ認識スルニ在リ。主ナル症候ハ齒槽突起部ニ於ケル高度ノ限局性壓迫疼痛ナリ。時トシテ骨ノ破壊作用甚シキ時ハ、指壓ニヨリテ局部ノ屈撓性ヲ感ズル事アリ。然レドモ一般ニ骨ノ膨隆ハ認メズ。又時トシテ、客觀的ニハ、殆ンド何等ノ所見ヲ認ムル事ヲ得ズ極メテ診斷ニ困シム事アリ。然レドモ斯ノ如キ場合ト雖モ「レントゲン」寫眞ニ就キテ精細ニ觀察スル時ハ必ズバ齒槽骨部ニ於ケル骨炎ヲ發見シ得ル處ナリ。

處置ノ第一ハ豫防ニ在リ、即チ肉芽腫ヲ有セル齒牙ヲ拔去セシ時ハ必ズ拔牙窩ヲ充分搔爬シ置クベキ事ナリ。若シ又、カハル疾患ノアル時ハ、局部切開ノ下ニ齒槽骨ヲ露出シ、病竈ヲ充分ニ搔爬スル時ハ豫後モ極メテ良好ニシテ、治癒モ速ニ且再發ヲ見ズ。

類症鑑別トシテハ、稀ニ惡性腫瘍ノ初期、又ハ上顎竇ノ疾患トノ鑑別ヲ要スル事アリ。最後ニ著者ハ、此ノ骨炎ハ必ズシモ稀有ナラザレドモ此ノ診斷ヲ下シ得ル事ノ頗ル稀ニシテ、而モ之ガ齒牙ノ疾患ニ起因スルモノナルヲ以テ齒科醫ノ注目スベキ事ナリト結論セリ。(金森)

保存療法科

ブラック氏原則ニ從ヘル充填物ノ永續性ニ就テ

Dauererfolge von Füllungen nach Blacks Grundsätzen. von Prof. Hans Pichler
u. Dr. Leopold Petrik, Zeitschrift für Stomatologie. 1930 Heft 11.

維也納大學ビヒラー教授ハ嘗テ米國ニ遊ビ教ヲ故ブラック氏ニ受ケ、其後充填學方面ニ於テ歐洲ニテ特ニブラック「システム」ヲ高唱シテキルノハ衆知ノ事柄デアル、本論文ハ充填學ニ於ケルブラック「システム」特ニ其二原則即チ接觸面ノ恢復ト豫防擴大トヲ顧慮シテ行ヘル充填ヲ臨牀的ニ觀察シタ結果ヲ報告シタモノデアル、論文第一項ハビヒラー教授自身ノ筆ニ成ル所デ、ブラック

「システム」ト現在行ハレテキル學問的關係ノ根據ヲ述ベタモノデアル、第二項ハベトリック氏ノ筆ニ成ル所デ、ビヒラ教授自身ノ自宅患者カラ 61 人ノ大小臼齒ニアル典型的ノ隣接面高洞(第二級高洞)ニ「アマルガム」充填(齒間分離後隔壁使用テ充填セルモノ)金箔充填及ビ金鑲嵌體充填ヲ施セルモノニツキ、10—25 年ニ互リ其ノ經過特ニ第二次齲蝕發生ノ有無ヲ検査シテ、其ノ結果ヲ經メタモノデアル、此ノ後半ノ論文ニ現ハレタル數字的資料ハ特ニ保存療法學上興味アルモノアルヲ以テドニ其ノ拔萃ヲシテ見ヨウ。先ヅ表第一ニ見ル如ク觀察年限ハ可成リ長ク繼續サレタモノデ、病症數ハ頗ル多イトハ云ハレナイガ、本問題ノ如キ場合甚ダ困難ヲ伴フモノデアルカラ、ヨク觀察出來タモノダト云フ感起キルノデアル。

觀察年數	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	11	10
病 症 數	6	3	4	4	3	2	5	8	8	2	8	3	1	2	2

次ニ齲蝕ニ對スル免疫、又第二次齲蝕發生ノ素因ハ患者年齡ニ大ニ影響アルモノデアルカラ、其等ノ關係ヲ第二表ニ收メテアル。

患 者 年 齡	—19	20—29	30—39	40—49	50—59	60—
觀察患者數	2	19	11	14	9	4
「プロセント」	3.4%	32.2%	18.6%	23.7%	15.3%	6.8%

カク一般的ノ用意ヲ行ツテ、又テ本題目ニ入ルノデアルガ、先第一各種充填物中ドレが一番永續性ガアルカ、ト云フ點ヲ検査シテキル、表第三ハ其レヲ示セル結果デアル、即チ金箔充填ガ第一ニ好結果ヲ示シ金「インレー」之ニ次イテ良イ、勿論前表中ノ無變化充填物ニ對スル觀察年限ニ各々多少ノ差違ハアル、即「アマルガム」充填ニ對シテハ平均 14.2 年、金箔充填ニ對シテハ

材 料	「アマルガム」 充 填	金 箔 充 填	金「インレー」 充 填
檢 査 充 填 數	382	105	212
觀 察 中 無 變 化 ノ モ ノ	298=78%	91=86.7%	180=84.9%
觀察中第二次齲蝕發生ノモノ	76=19.1%	10= 9.5%	22=10.4%
觀察中脱落又ハ破碎セルモノ	8= 2.9%	4= 3.8%	10= 4.7%

14.6 年、金「インレー」ニ對シテハ 11.9 年デアツタ。尙「アマルガム」充填其ノモノハ他二種ニ比シ劣ツテキルガ、然シ想像シテ居タヨリハ其結果ヲ示シテキルノ決シテ永久充填物トシテ惡評ヲ與ヘテハナナイノデアル。

次ニ第二次齲蝕發生ノ位置ヲ觀察スルニ(表略)各種充填物何レモ頰側高縁ニ發生セルモノ最も屢ナリ、是ハ稍々意外ノ結果デ其ノ原因ヲ捕捉スルコト困難デアルガ、恐ラク外觀美ヲ顧慮シテ不知不知ノ間ニ頰側ノ豫防擴大不十分ナルト、舌側ナドニ比シ自淨作用渺キ爲メデアラウ、又齒齦高縁ニ於ケル發生度ハ金「インレー」ニ最も多イノハ、鑄造體ノ此部ニ於ケル收縮ガ常

＝起り易イ爲ト、接著時此部ノ壓抵不充分ナルト＝歸因サレル、咬合面デハ流石第二次蝕蝕ノ發生ハ最モ容易ニ豫防シ易イノテ殆ド其ノ例ヲ認メナカツタノデアル。次ニ第二次蝕蝕が遠近心面何レノ部ニ多ク現レタカラ見ルニ、遠心面ノ方約2倍半位多數ヲ示シテキル、恐ラク充填操作上ノ困難が其ノ主因デアロウ。又上下顎何レニ多ク發生セルカラ見ルニ、兩顎共特別ニ差違ヲ認メナカツタ、即チ上顎49.1%,下顎50.9%,又左右側何レガ多ク發生セルカラ見ルニ、金箔充填,金「インレー」共兩側同シデアルガ、唯「アマルガム」充填デ、右44.7%,左55.3%ヲ示セル様ニ左側が可成り屢々發生シテキルノヲ認メタ。原因ハ説明ニ苦シムガ、カノチユルクハイム氏ノ蝕蝕發生度検査ニ云ヘルガ如ク、多數ノ人ハ右下ニテ就寢スル故、睡眠中唾液ハ右ニ滯リ、爲ニ右側ニハ蝕蝕發生度数が減ズルト云フ説明ト相一致シテキルガ、或ハ偶然ノ結果左側ニ多ク發生シタノカモ知レナイ。

次ニ第二次蝕蝕ノ發生が充填後如何程ノ時日經過後ニ來ルノガ多イカト云フ點ヲ検査シテ見ルト、次ノ表が示ス通りデアル。

観 察 年 数		1—5	6—10	11—15	16—20	21—25
「アマルガム」 充 填	観 察 数	374	329	234	133	23
	第二次蝕蝕数	37	18	12	8	1
	「プロセント」	9.9%	5.5%	5.1%	6.0%	4.3%
金 箔 充 填	観 察 数	101	96	83	41	13
	第二次蝕蝕数	3	2	2	2	1
	「プロセント」	2.8%	2.1%	2.4%	4.9%	7.8%
金「インレー」	観 察 数	202	189	109	60	9
	第二次蝕蝕数	9	8	3	2	—
	「プロセント」	4.5%	4.3%	2.8%	3.3%	—

更ニ右三表ヲ一ツニ纏メルト、

観 察 年 数	1—5	6—10	11—15	16—20	21—25
充 填 数	677	614	426	234	45
第二次蝕蝕数	49	28	17	12	2
「プロセント」	7.2%	4.6%	3.9%	5.1%	4.4%

即チ第二次蝕蝕發生ノ最危険率ヲ示スノハ充填後5年間デ、ソレカラ15年頃マデハ段々ト減少シ、後又漸次増加ノ傾向ガアルノデアル。是蝕蝕高形成ヲ惹起シタ素因ハ充填後ト雖モ後ニ免疫ニナツテシマウマデ尙其所ニ數年ハ殘ツテキルデアロウシ、或ハ又若シ充填時ニ缺點ヤ失敗ガアルナラバ、初メノ5年間位ニ其レカラ生ズル結果ガ現ハレテ來ルニ違イナイカラデアル。

今一ツ甚ダ奇妙ニ思フノハ、次表ニ見ル如ク各種充填物ヲ通ジテ、齒齦縁ニ生ズル第二次蝕蝕ノ甚ダ遅ク發生スルコトデアル、コハ元來最モ危険ノ多イ部デアルノダガ、彼ノブラック氏ノ唱フル様ニ此部ハ常ニ齒齦縁下迄高縁ヲ下ゲテ置イタ爲デ、カクスル事ニ依テ如何ニ蝕蝕發生ヲ豫

防シウルカラ充分ニ示シ得タノデアル。(長尾)

	頰側ノ 第二次蝕蝕	舌側ノ 第二次蝕蝕	齒齦縁ノ 第二次蝕蝕	頰舌兩側ノ 第二次蝕蝕
「アマルガム」充填	7.7年	7.3年	11.2年	3.5年
金箔充填	1.9,,	2.5,,	12.0,,	8.7,,
金「インレー」	0.7,,	1.0,,	10.4,,	3.5,,

陶 材 充 填

Porzellanfüllungen. von Dr. med. dent. Carl Ulrich Fehr, Berlin.

V. f. Z. 1930 H. 1.

充填材料ノ選擇ニハ諸種材質ノ特性ニ關スル精確ナ知識ガ必要デアル。材料ノ選定ト、窩洞ノ形成ト、材料ノ取扱方トハ充填ノ效果ヲ舉ゲルタメニ最重要ナ三條件デアル。良心的ナ臨牀家ハ誰シモ所謂 100 %ニ完全ナ充填ヲ行フ事ノ不可能ナコトヲ承知シテ居ル。一般ニ充填材料ニ對シテハ、不溶解性、不變形性、縁端強度、齒牙色類似性ノ四要求ガアル。陶質ハ是等四ツノウチ不溶解、不變形、齒牙色類似ノ三性質ヲ具ヘテ居ル。縁端強度ニ就テハ金ニ及バナイガ、少クトモ「アマルガム」及ビ硅酸「セメント」ニ比シテ毫モ遜色無イノミナラズ寧ロ是等ニ勝ルコトハ Le Gro 氏ノ強度試験成績及ビ吾人ノ臨牀經驗ニヨツテ確カデアル。陶質特有ノ長所トシテ口腔組織ニ對スル無刺激性トイフ全ク獨特ノ性質ガアル。齒牙充填材料トシテ陶質ノ用キラレタノハ言フ迄モナク古クカラノ事デアルガ、其普及程度ノ金ニ及バナイノハ陶材充填體邊緣ノ可塑性ヲ缺クタメテ、金充填體ノ如ク薄イ邊緣ヲ作ツテ珐瑯縁ヲ保護スルコトガ出來ズ、「從ツテ「セメント」層ノ溶解ニヨル充填體輪廓線ノ著色ヲ避ケ難イトイフ憾ガアル。

窩洞形成ノ基本ハ金鑲嵌體ニ對スルト同一デアル。即チ充填體ヲ唯一ツノ方向ニノミ窩洞内ニ挿入シ得ル様ニ、而モ此方向ニ向ツテ充填體ガ對咬齒ニヨツテ多少トモ窩洞底ニ壓セラレル様ニ窩洞形成ヲ行フコト。前齒ノ切端及隅角部ノ補綴ニハ、充填體ニ白金釘ヲ熔著シテ錠著手段トスルコトヲ避ケ、他ノ齒牙ニ於ルト同ジク、充填體ノ錠著ハ窩洞ノ箱形形成ニヨツテ得ル様ニスベキコト、等デアル。但シ陶材ハ厚サ或ハ幅ノ小サイ場合ニ特ニ外力ニ對シテ弱イモノデアルカラ、陶材鑲嵌體ニハ可及的單純純圓ナ形狀ヲ與ヘル様ニ、窩洞ノ形成ヲ加減スベキデアル。窩洞内ニ